

かすかに膨らむ草木の芽吹きや、水辺の凍てゆるむ風情が春の気配を知らせてくれる。

陰暦二月を如月と呼ぶのは中国での異称をそのまま用いたものであるが、

日本での「きさらぎ」という名の由来には諸説ある。

寒さがまだ残っており衣を更に着るので「衣更着」…

また、草木の芽が張り出す月であるから「草木張月」が転じたとする説もある。

風にも光にも植物にも季節の気配は織りこまれている。

人間の心が大自然に素直にふれたとき、そこから芸術が生まれる。

# SOUL OF Ise Shunkei

ふるさとの風  
如月

## ～ 魂の器 伊勢春慶 ～

海外で“japan”といえば漆器のこと。

マルコ・ポーロが著した『東方見聞録』の中で Zipangu（ジパング）の名称でヨーロッパに紹介された日本。1867年（慶応三年）のパリ万国博覧会あたりをきっかけに世界から Japan（漆器の国を意味する）と呼ばれるようになった。

「伊勢春慶」—それはかつて伊勢を中心として大量に作られた工芸品ではない日常の漆器である。春慶塗は天然の木目の美しさをそのまま生かした透明塗の一種で、和泉国堺の漆工春慶が創始した技法である事からその名がついたといわれる。岐阜県高山市の飛騨春慶、秋田県能代市の能代春慶、茨城県城里町の栗野春慶（水戸春慶）が日本三大春慶塗として広く知られている。

伊勢は全国からの神宮への参拝者を対象として様々な伝統産業が生まれた。伊勢春慶の初まりは『宇治山田市史』によると、室町時代 神宮の工匠が御造営の余材を受けて内職として始めたとしている。

伊勢春慶の多くは桧の板を素材とした頑丈な作りの箱物である。

木地に弁柄や食紅などで着色し柿渋で下塗りを重ね最後に透明な春慶漆を薄く施す。

伊勢春慶特有の赤褐色が鮮やかで漆の奥に木目が透けて見え素朴な風合いが生かされている。

底の隅には水漏れを防ぐためと食べ物が隅に残らないために“こくそ”と呼ばれる黒い目留めがみられ、また底の裏に製造元の漆器店の印が押されているのも特徴の一つである。

～粗ナリト謂ヘドモ廉価ニテ堅固～

明治期の文書に記されているように上品さはないが頑丈で比較的安価な伊勢春慶は日用雑器として大量に生産され「伊勢国産漆器」のブランドとして定着、全国に出荷されていった。

しかし戦後漆の入手が困難になった事や職人不足、さらに高度成長期を迎えての生活の変化等の要因によるプラスチック製品の登場。伊勢春慶は暮らしの中で急速に行き場を失う。

長く続いた伝統産業は終止符を打つことになった。

河崎は「伊勢の台所」と呼ばれた町である。今も黒壁の蔵や商家が並び往時の面影がただよう。

かつて伊勢春慶の発信地でもあった河崎でふるさとの漆器を見直そうと動き出した人々がいる。知識や技術、さらに経験を重ねた人々、そして何よりも伊勢春慶を愛し、魅了された人々が立ち上がったのである。谷崎潤一郎は「陰翳礼讃」の中で日本人が光の描き出す陰翳をいかに愛でてきたかその独特な感性について記している。漆器も同様、薄暗い中でこそ美しさが映える陰翳礼讃の世界である。

しかし伊勢春慶は趣を異にして、明るい太陽の光に照らされ現代の生活の中でこそ生きる漆器である。

名も無き職人が作り日々の暮らしに溶け込み重宝に使われた漆器…。

その伝統の良さに現代の感覚を重ね新しく甦る。

伊勢春慶には古き良き時代に忘れ去られた私たちの魂が宿っているのかもしれない。